

姫路市

西脇丸山2号墳

(主) 姫路上郡線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23(2011)年3月

兵庫県教育委員会

西脇丸山2号墳

(主) 姫路上郡線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23(2011)年3月

兵庫県教育委員会



調査地遠景 東から



古墳遠景 東から



出土遺物①（土器・刀）



出土遺物②（耳環）



M16



M17



M18



M20



M21



M22

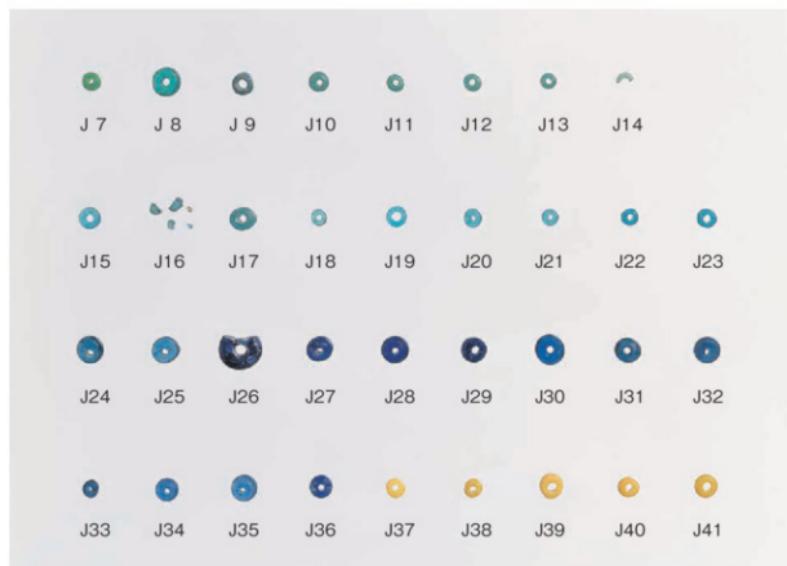
出土遺物③（空玉）



出土遺物④（玉類セット）



出土遺物⑤ (切子玉・管玉等)



出土遺物⑥ (小玉)

例　　言

1. 本書は兵庫県姫路市西脇字丸山に所在する、西脇丸山2号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(主)姫路上郡線道路改良事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民局長(姫路土木事務所)の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成16年度に本発掘調査を実施した。
3. 出土品整理は兵庫県中播磨県民局長(姫路土木事務所)の依頼を受けて、兵庫県立考古博物館が平成21年度と平成22年度に実施した。
4. 本書に使用した方位は国土座標(第V系)の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海面(T.P.)を基準とした。
(世界測地系に換算)
5. 地図は、挿図1:国土地理院「姫路」1/25000を使用した。
6. 執筆は、深江英憲が遺構を、池田征弘が遺物を分担して行った。
7. 報告書の作成にあたっては、岡田美穂の補助のもと、深江が図集を行った。
9. 本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

凡　　例

1. 報告遺物の名称については、土器は番号のみを付した。また、石製品はS、金属器(金銅製耳環・金銅製空玉等含む)はM、玉類はJを頭文字とし、後に番号を付した。
2. 土器等の断面については、土師器及び土製品は白抜き、須恵器及び陶磁器は黒塗りとした。
3. その他の石製品、金属器、玉類の断面については、白抜きとした。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	(深江英恵) 1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査の概要	
第3節 整理作業	
第2章 遺跡の位置と環境	(深江) 3
第3章 発掘調査の成果	
第1節 概要	(深江) 5
第2節 遺構	(深江) 5
第3節 遺物	(池田征弘) 6
第4章 まとめ	(池田) 13

挿図目次

図1 調査区位置図	2
図2 西脇丸山2号墳と周辺の主な遺跡	4
図3 銀の合わせ目 (M 15)	8

表 目 次

表1 出土土器 法量表	9
表2 出土石製品 法量表	10
表3 出土ガラス製玉類 法量表	10
表4 出土金属器 法量表	12

卷頭図版目次

卷頭カラー写真1	調査地遠景 東から	卷頭カラー写真3	出土遺物③（空玉）
	古墳遠景 東から		出土遺物④（玉類セット）
卷頭カラー写真2	出土遺物①（土器・刀）	卷頭カラー写真4	出土遺物⑤（切子玉・管玉等）
	出土遺物②（耳環）		出土遺物⑥（小玉）

図版目次

図版1	調査前地形測量図	図版5	出土土器
図版2	石室平面図・立面図	図版6	出土玉類
図版3	玄室遺物出土状況図	図版7	出土金属器①
図版4	墳丘部分断面図	図版8	出土金属器②・出土石製品

写真図版目次

写真図版1	調査前近景 東から	写真図版10	石室内遺物出土状況③ 西から
	古墳調査前全景 東から		遺物出土状況①（須恵器等）
	古墳調査前全景 南西から		遺物出土状況②（須恵器等）
写真図版2	調査地遠景 東から	写真図版11	遺物出土状況③（須恵器等）
	古墳遠景 東から		遺物出土状況④（刀）
写真図版3	古墳遠景 西から		遺物出土状況⑤（耳環）
	古墳遠景 北から	写真図版12	遺物出土状況⑥（耳環）
写真図版4	古墳近景 東から		遺物出土状況⑦（切子玉・管玉）
	古墳近景 南から		遺物出土状況⑧（空玉）
写真図版5	石室全景① 東から	写真図版13	遺物出土状況⑨（空玉）
	石室全景② 東から		遺物出土状況⑩（空玉）
写真図版6	石室全景③ 東から	写真図版14	遺物出土状況⑪（空玉）
	石室全景④ 西から		遺物出土状況⑫（切子玉）
写真図版7	石室南側埴土層断面 東から		遺物出土状況⑬（切子玉・玉）
	石室南側石① 北東から		遺物出土状況⑭（子玉）
	石室南側石② 北から	写真図版15	石室側石除去状況 東から
写真図版8	石室北側埴土層断面 東から		石室奥石及び側土層断面 南から
	石室北側石① 南東から	写真図版16	出土土器①
	石室北側石② 南から	写真図版17	出土土器②
写真図版9	石室内遺物出土状況① 東から	写真図版18	出土土器③・土製品
	石室内遺物出土状況② 東から	写真図版19	出土鉄器

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経過

西脇丸山2号墳は、姫路市西脇字丸山に所在する。当該地は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所が計画を進めている（主）県道姫路上郡線道路改良事業に伴い、平成12年度分布調査（遺跡調査番号：2000243）を実施した際、本線部分について埋蔵文化財は認められなかったものの、工事範囲外の民有地について付帯の削平工事が計画されていることが判明し、平成16年5月に土地所有者、姫路土木事務所立会のもと、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が再度分布調査（遺跡調査番号：2004170）を実施したところ、現道と新設道路予定地に挟まれた竹を主とする山林において、横穴式石室を持つ古墳1基を確認し、「西脇丸山2号墳」と命名された。

上記の再分布調査の結果を受け、付帯工事の施工予定地内において、調査範囲の確定が必要となったため、平成16年6月に確認調査（2004178）を実施した。この結果、古墳の周溝の北方（墳丘側）と、南方（外側）と考えられ傾斜変換点を確認し、本発掘調査範囲の確定がなされた。

当該事業は、本線道路部分の工事が既に開始しており、早急に発掘調査を実施する必要があったため、中播磨県民局長からの平成16年6月10日付け「中播（姫）第1079号の依頼に基づき、本発掘調査を実施した。

確認調査及び本発掘調査の体制は、以下の通りである。

1. 本発掘調査（遺跡調査番号：2004177）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査第2班 主査 深江 英恵

主任 池田 征弘

調査期間：平成16年8月24日～平成16年10月14日

調査面積：308m²

第2節 調査の概要

本発掘調査の調査区は、確認調査で確定した範囲を基に、新設道路予定地側の一部が盛土の堆積で崖状になっていること、石室と現道側の法面とが極めて近接すること等を考慮して設定を行った。

発掘調査にあたっては、先ず平板測量による現況地形測量（1／100）を行い、石室内に落ち込んだ石材（天井石若しくは壁礎）にワイヤーロープを掛け、バックホーを使用して吊り上げ、若しくは引きずり出した。

次に、石室内については、人力によって床面まで徐々に掘り下げて、遺物の検出に努め、遺物の混入が考えられる埋土については、現地より持ち帰り、簡易にかけるために、採集地区を明記しながら、土壠詰めにした。

また、石室外は、調査区全体に広がる竹の根や、厚く堆積した盛土を除去するため、石室及び周溝、墳丘等に影響が及ばない範囲についてバックホーによる掘削を導入し、それ以外は、人力により掘削を行った。

石室内は、玄室の北側壁の一部が抜き取られ、玄室内の床面に副葬品が散在する等、盗掘を受けた状況が窺えたが、須恵器、土師器の他、鉄刀や刀子、金銅装の空玉や耳環等の金属器類、ガラス小玉や水晶製切子玉等の玉類が検出された。また、平成16年9月25日には、これら盗掘の被害から辛うじて免れた出土遺物を中心に、地元説明会を実施し、周辺地区住民を中心として約130名の参加があった。



図1 調査区位置図

第3節 整理作業

1. 平成21年度の出土品整理作業

平成21年度は、接合補強、実測等を行った。整理作業に係る、体制は以下の通りである。

- ・整理保存班 主査 篠宮 正
- ・調査第2班 主査 深江 英憲
主査 池田 征弘
- ・嘱託職員（遺物接合補強等） 西口 由紀 又江 立子 小野 潤子
- ・嘱託職員（遺物実測等） 岡田 美穂

1. 平成22年度の出土品整理作業

平成22年度は、遺物実測、復元、遺物写真撮影、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷・刊行を行った。整理作業に係る、体制は以下の通りである。

- ・整理保存課 主査 篠宮 正
- ・企画調整課 主査 深江 英憲
- ・調査第2課 主査 池田 征弘
- ・嘱託職員（復元等） 西口 由紀 又江 立子 小野 潤子
- ・嘱託職員（遺物実測・図面補正・トレース・レイアウト等） 岡田 美穂

第2章 遺跡の位置と環境

西脇丸山2号墳は、姫路市西脇字丸山に所在し、市域でも西端の太市地区にあり、大津茂川中流域にあたる。

大津茂川は、中世白亜紀に形成された流紋岩質火砕岩からなる相生層群赤穂累層と城山花崗岩との間に、狭い谷を形成しながら南流し、瀬戸内海に注ぐ。このために、流域には殆ど平野を形成していないが、太市付近では、東西に龍野一上郡断層が走り、これに沿って僅かに平地が形成されている。この断層地形は古くから交通路として利用され、現在では、県道姫路上郡線やJR姫新線が通る。

西脇丸山2号墳が所在する太市地区は、西脇・石倉・太市中・相野の2集落が明治22年に合併して太市村となり、さらに昭和29年に姫路市に合併されて、現在に至っている。当地は、明治期より孟宗竹の栽培・出荷が盛んで、近年では「太市の筍」の産地として知られている。

現在、当該事業である県道姫路上郡線が通る余部から相野を経て櫻坂に至る東西路は、古代山陽道のルートに比定され、当地周辺が太市（邑智）の駅家に推定地にあたる。「オオイチ」の地名は、「邑智里」として播磨国風土記にも見え、この地を行幸した応神天皇による口伝「吾は狭き地と思ひしに、こはすなわち大内なるかも」が地名の由来と伝えられる。のことからも、当地一体が古くから交通の要衝にあったことが窺え、その地には古くから多くの遺跡が形成されるのである。

西脇丸山2号墳の周辺では、縄文時代の散布地である鷹ノ子池遺跡（31）が隣接する他、大津茂川流域において多くの遺跡が形成される。

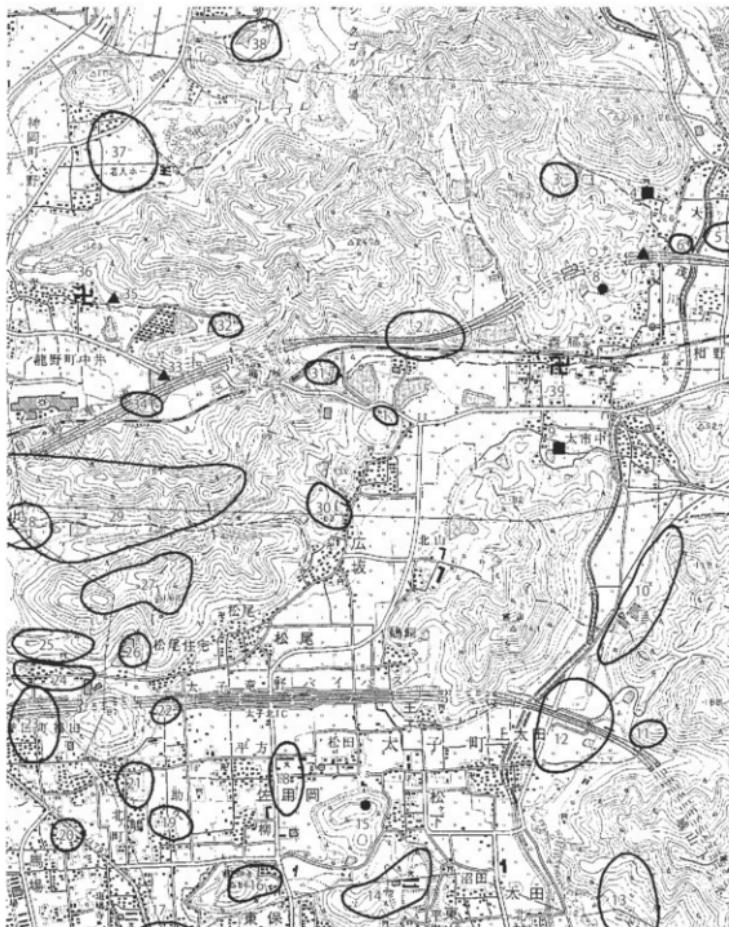
弥生時代には、前期の集落として平方遺跡（18）が知られ、住居跡が確認されているが、状況が判明している遺跡は少ない。中期に入ると、遺跡の数、規模共に増大し、亀田遺跡（12）等の中核的な集落が出現する。この地域では、中期後半以降、山上に高地性集落が形成されるが、後期前半には衰退し、後期後半以降、新たに集落が形成される。また、後期末葉には、箱式石棺を主体部とする墳墓が築造され、笠山墳墓群（27）等が知られる。

古墳時代には、前期古墳として松田山古墳（15）が知られ、堅穴式石室から斜縁二神二獣鏡・鉄器・銅鏡・筒形銅器・玉類等が出土している。中期古墳としては、黒岡山古墳群中の1基が知られる。後期としては、太市中古墳群（10）が知られ、その北西、大津茂川を挟んだ南向き斜面には、破盤神社西古墳（8）が単独で存在する他、7世紀にかけて130基余りの古墳が築造された西脇古墳群がある。また、亀田遺跡の東側の尾根上には、終末期の群集墳である上太田古墳群（11）が見られる。この時期の集落跡としては、亀田遺跡等が調査されているが、調査例が少なく、実態が不明な遺跡が多い。

奈良時代には、官衙関係の遺跡では、古代山陽道の太市駅家と推定される向山遺跡（9）が知られ、播磨国府系瓦である長坂寺式・古大内式の軒瓦が出土している。

また、寺院跡では、白鳳時代に遡る上太田庵寺が知られ、塔心礎・礎石群が現存し、法起寺式の伽藍配置を持つと考えられており、向山遺跡の北西にある西脇庵寺（39）でも塔心礎が遺存する他、須恵器・瓦の散布が認められる。

古代末から中世には、揖保川下流域の段丘面を中心に、莊園開発が進み、11世紀初頭には成立していた鶴荘は大和の法隆寺領として文書・絵画が残り、当時の状況が良好に把握できる。この他、中世の集落である福田片岡遺跡・中後瀬遺跡（6）等が知られる。



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|--------------|-----------|
| 1 西脇丸山2号墳 | 9 向山遺跡 | 17 鶴遺跡 | 25 明神山墳墓群 | 33 中井鶴池塗跡 |
| 2 西脇古墳群 | 10 太市中古墳群 | 18 平方遺跡 | 26 笹山遺跡 | 34 中井古墳群 |
| 3 観音寺古墳群 | 11 上太田古墳群 | 19 枝重遺跡 | 27 笹山墳墓群 | 35 中井瓦窯跡 |
| 4 相野散布地 | 12 亀田遺跡 | 20 馬場遺跡 | 28 内山遺跡 | 36 中井廃寺 |
| 5 観音寺遺跡 | 13 黒丘神社古墳群 | 21 城山遺跡 | 29 内山古墳群 | 37 入野遺跡 |
| 6 中後瀬遺跡 | 14 丹生山古墳群 | 22 福田八軒屋遺跡 | 30 広坂墳墓群 | 38 寄井遺跡 |
| 7 観音寺塗跡 | 15 松田山古墳 | 23 福田天神遺跡 | 31 鷺ノ子池遺跡 | 39 西脇廢寺 |
| 8 破磐神社西古墳 | 16 前山古墳 | 24 坊主山遺跡 | 32 中井花(奥)池遺跡 | |

図2 西脇丸山2号古墳と周辺の主な遺跡

第3章 発掘調査の成果

第1節 概要

西脇丸山2号墳は、分布調査段階から明らかであったが、後世の開墾や土の流出等で、石室周辺の埴丘盛土は殆ど原形を止めておらず、僅かに奥壁側で盛土の残存が認められる程度であった。また、古墳の範囲確認として実施した確認調査時に検出した周溝や埴丘裾部の立ち上がりは、断面観察では明確な地山の掘り込みとして確認できたが、平面上では明確なプランが認められないばかりか、周溝の掘方内と考えられる部分の埋土には、近世以降の陶器類、鉄、ガラス等が混入しており、後世の激しい開墾の痕跡が窺えた。しかし、掘り込み部分が、玄室を中心とした周溝の推定位置として妥当な箇所当たるため、本来の周溝部分と、後世の開墾部分が一部重複していたとも考えられる。さらに、漢道部付近は、漢道の方向に沿う形で埴丘外へ溝が切られ、尾根底部まで伸びていた。土地所有者によると、幼少期に石室の漢道部内で遊んだ記憶があるといい、また漢道部付近で近現代の遺物も認められる。これは、古墳の墓道を山林に入る道として転用したか、新たに林道として開削したものと考えられる。

古墳の石室構造としての残存状況は、側石と奥壁の上部が盛土から顔を出し、石室内部には天井石や側石の一部と考えられる大小の石が落ち込んだ後に土が流入し、特に漢道部付近は竹林の繁茂により、崩落した石をお越して、所々で空間が見られる。また、石室の北側石の一部や奥壁は現県道（当時）南側斜面の崩落防止ネットのアンカーが突き刺さり、思いがけない再利用がなされていた。

第2節 遺構

1. 墳丘（図版1・4 写真図版4～8・15）

墳丘北側及び西側は、現県道（当時）の削平を受けて崖になっており、墳丘自体も削平が進んでいる。また、墳丘南側を主体とする周辺部分においても、前節で述べた通り、後世の開墾により、奥壁側の一部を除いて殆ど失われている。僅かな地形変化で想定される墳丘規模は、直径約20mと考えられる。

墳丘の掘削に際しては、石室の玄室部分を中心に、東西方向と南北方向の合計3箇所（図版4：唯A～C）に柱を設定し、断面観察に努めた。このうち、唯B・Cは、表土以下の殆どの堆積が、近世以降の遺物を含むような堆積で、唯一唯Cの3層が築造当時の盛土と考えられる。また、唯Aは、奥壁を据えるために地山を大きく掘削している分、盛土が若干残存しており、確実に築造時の盛土層である7・8層以上でも非常に良くしまっており、盛土の一部と考えられる。

遺物は、墳丘及びその周辺から陶器壺（16）、須恵器壺（18）等が出土した。

2. 石室（図版2・3 写真図版8～15）

石室は、玄門部南側に袖を持つ片袖式であり、石室内法が、奥壁から漢道部側壁端までの全長約8.0m、玄室長約3.5m、玄室幅約1.5m、漢道部幅約1.2m、残存漢道部長約4.5mを測り、玄室部側壁の一部を除いて、基底石のみ残存していたが、北側壁と漢道部では1箇所ずつ基底石が失われており、破碎あるいは抜き取られたものと考えられる。後述するが、その状況から盜掘を受けたものと考えられる。

石室内は、漢道部から玄室の東半部（玄門側）において、近世以降と考えられる染付け磁器等や多量の貝殻が出土した。また、漢道開口部付近の床面から前庭部は、溝状に大きく掘り窪められており、

石室が開墾時も含めて、少なくとも近世以降において、何らかの形で再利用されていたものと想定される。それとは逆に、玄室の西半部側（奥壁側）では、基底石が破砕された、或いは抜き取られた北側壁の一部を除いて近世以降の遺物が出土しておらず、盜掘によって二次的に手が加わったものの、ある時期に生じた石室の崩落と土砂の流入によって、玄室西半部の床面が塞がれ、それ以降の影響を免れたものと考えられる。

玄室東半部及び後道部付近で出土した遺物のうち、図化及び写真等の記録をとったものとしては、須恵器高杯（4・12）、須恵器杯身（14）、須恵器杯蓋（9～11）、須恵器平瓶（13）、須恵器長頸壺（15）、土製品（23・24）、鉄製刀子（M2・M3）、鉄製釘（M4～M7）、蓋状鉄製品（M11）、金銅製耳環（M15）が認められる。

玄室西半部では、床面付近において、比較的まとまった遺物が出土している。前述したように、玄室北側側壁の一部に基底石の抜き取りとも考えられる痕跡が認められ、一部には後世の遺物の混入が見られるものの、その大半が当時の遺物として出土した。当該箇所からは、須恵器杯身（2・3）、須恵器杯蓋（1）、須恵器高杯（5）、須恵器甌（6）、須恵器甌（7）、土師器甌（8）、土師器皿（17）、土師器皿（19・20）、陶器小型鉢（21）、白磁小皿（22）、石製品（S1）、ガラス小玉・水晶製切小玉・碧玉製管玉・瑪瑙製玉等の玉類（J1～J41）、鉄製刀（M1）、金銅製耳環（M12～M14）、金銅製空玉（M16～M18・M20・M21）、金箔片（M22）、その他不明鉄製品（M8～M10）が出土した。このうち、金銅製耳環は、石室内より4点出土しており、少なくとも2体の遺骸が埋葬された事が窺われる他、5点出土の金銅製空玉は、遺存状態が悪いながら、兵庫県下でも非常に珍しい出土例である。

また、出土した完形及び復元完形の須恵器（杯身・杯蓋等）から、7世紀初頭の古墳であることが判明した。玄室内は、盜掘を受けたものと考えられ、玄室内の端々に寄せられた遺物、或いは中央付近に散在している遺物もあり、既に原位置を止めている事が窺える。盜掘時期については、近世以前で推測しうる明確な遺物が出土しておらず不明だが、古くからの街道沿いを眺める尾根上とった、古墳の立地を考慮すると、遺骸埋葬後からそれほど遙くない段階で盜掘を受けたものと考えられる。

第3節 遺物

出土した遺物は土器・陶磁器・金属製品・石製品・ガラス製品などがある。時期的には古墳時代のものとそれ以降（平安時代～近世）のものに大きく分かれる。平安時代以降の再利用・盜掘などにより出土の遺物は多くない。

1. 土器（図版5、写真図版16～18）

出土した土器は古墳時代のものと古代～近世のものとに分かれる。

①古墳時代の土器

1～8は玄室内、9～13は後道部、14～16は石室周辺から出土したものである。

1は須恵器杯蓋で、口径は11.8cmと小さい。天井部外面はヘラ切り未調整である。2は須恵器杯身で、口径は10.8cmと小さい。底部外面はヘラ切り未調整である。3は須恵器杯で、底部外面にヘラケズリが施されている。口縁部は歪んでいる。器高は4.8cmである。4は須恵器高杯の脚部である。5は須恵器無蓋高杯である。杯部は2条の段状の凹線をもっている。脚部は2段の3方透かしであるが、割付が不均一で、透かしもヘラで切れ込みを入れた程度である。6は須恵器甌である。底部は手持ちヘラケズリが

施されている。7は須恵器壺の口縁部である。外面には凹線間に縦方向のハケメが施されている。

8は土師器壺である。口縁部が通常のものよりはすこまつ氣味で、口縁が直立している。体部内面はナデが施されている。

9～11は須恵器杯蓋である。9・10は天井部外面に回転ヘラケズリが施され、縁部との境に凹線が廻っている。口縁端部に面は認められない。MT 8.5型式と考えられる。11は口径が11.9cmと小さい。12は須恵器無蓋高杯である。杯部外面に鋭く突き出す棱をもっている。13は須恵器長頸壺である。頸部に2条の凹線をもっている。

14は須恵器杯蓋である。口径は12.0cmで、天井部外面はヘラ切り未調整である。15は須恵器長頸壺である。胴部には2条の凹線の間に格子文が施されている。16は須恵器壺である。口縁部が断面長方形の縁帯状を呈している。

②中・近世の土器

盜掘あるいは再利用時のものと考えられる。18が掘方上の搅乱から出土した以外は玄室内から出土したものである。

17は土師器皿である。口縁部はやや内唇する。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデが施され、底部外面は不調整である。13世紀頃のものと考えられる。

18は須恵器壺である。底部は円盤作りで、底部外面は不調整である。

19・20は土師器皿である。19は底部回転切りで、口縁端部は全周にススが付着している。20は底部回転系切りで、底部外面以外は柿袖が施されている。

21は京焼系の施釉陶器小型鉢である。底部は回転ヘラケズリが施され、底部以外には透明釉が施されている。

22は白磁皿である。見込みにスタンプによる文字文が入れられている。幕末以降のものである。

23・24は泥面子である。23は菊花状、24は蕉状の形態を呈している。

2. 玉類（図版6、巻頭カラー写真3・4）

玉類は玄室内から出土している。いずれも古墳の副葬品と考えられる。金属製の空玉については金属製品の項目で述べる。水晶製切子玉・碧玉製管玉・琥珀製小玉・ガラス製小玉（緑）は玄室中程、ガラス製小玉（緑・青緑）は石室奥から出土している

J 1～4は水晶製切子玉である。J 1～3は長2.2～2.1cmで、片側穿孔である。J 4は長1.7cmとJ 1～3より短く、水晶の透明感が劣っている。穿孔は片側穿孔と思われるが、穿孔側の孔径があまり大きくなない。

J 5は碧玉製管玉である。片側穿孔である。

J 6は琥珀製小玉である。穿孔は梢円形を呈し、穿孔面もいびつである。

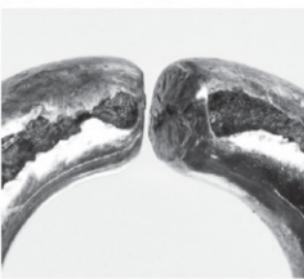
J 7～34はガラス製小玉である。色調により大きく4つに分かれる。J 7～14は緑色（10GY～10G）で、径3・4cm台のものが多い。J 15～23は青緑色（5BG～5B）で、径3cm前後のものが多い。J 24～36は緑色（10B～5PB）で、径5cm前後のものが多い。J 37～41は黄色（5Y）で、径4cm前後のものが多い。

3. 金属製品（図版7・8　　巻頭カラー写真2・3　　写真図版19）

金属製品には鉄製品、銅製品、銅銭などがある。

鉄製品には鉄刀、刀子、鉄釘、蓋状製品、不明品などがある。鉄刀（M1）、刀子（M2）は古墳の副葬品と考えられるが、鉄釘（M4～7）、蓋状製品（M11）、不明品（M8～10）は再利用・盗掘時のものと思われる。

M1は鉄刀である。全長43.6cm、刀身長32.7cm、茎長10.9cm、刀身幅3.2cmである。刀身は直刀で、関部は直角の両面である。尻から2.8cmのところに目釘孔が穿たれ、目釘が残存している。関部には鍔が嵌められている。玄室中央部の左壁付近から出土したものである。



第3図 銀の合わせ目（M15）

M2・3は刀子である。玄門付近の擾乱土から出土したものである。M2は刀身部で、サビによって膨らんでいる。刀身幅は1.2cmである。M3は茎部で、表面に柄の木質が付着している。

M4～7は鉄釘である。M4～6は断面方形で、曲がっている。玄門付近で出土したものである。M7は断面円形である。

M8～10は不明品である。玄室東南部で出土したものである。M8・9は薄い鉄板を断面長方形に卷いたものである。M10は薄い鉄板の端を折り返したものである。

M11は蓋状の製品である。玄門部付近で出土したものである。上部中央につまみ状のものが、高く棒状に突き出ている。

銅製品には耳環と空玉がある。

M12～15は耳環である。M12・13は玄室奥、M14は玄室中央、M15は玄門部左壁付近から出土したものである。M12・13はやや小型で、幅2.6cm、高さ2.3cmである。断面は円形に近く、径がいずれも0.5cm程度である。銅芯金貼で、地金は中実である。M14は幅3.2cm、高さ3.0cmである。断面が楕円形で、長径1.0cm、短径0.7cmである。銅芯金貼で、地金は中空である。M15は幅3.1cm、高さ2.8cmである。断面が楕円形で、長径0.8cm、短径0.7cmである。銅芯銀貼で、地金は中実である。環の切れ目の部分では銀を包み込んだ時の合わせ目が認められる（第3図）。

M16～18・20～22は金銅製空玉である。玄室奥から出土したが多い。6点出土しているが、地金の銅の腐食が激しく、形状を保っているのはM16～18の3点のみである。M16は約半分ほど残存している。楕形のものを2つ合わせて球形にしている。幅11.8mmで、長さは14mm程度と復元でき、ややラグビー・ボール形を呈している。孔の周囲が盛り上がっていることから、孔は内側からあけられていることがわかる。

銅銭は1点出土している。M19は寛永通寶である。玄室東南部で出土したものである。

4. 石製品（図版8　　写真図版19）

石製品は玄室内より不明品が1点出土している

S1は厚さ4mmの薄い板状の不明品である。断面図の左端部のみ側面が残存し、その他は破面である。縁は面取りがなされている。表裏両面は非常によく研磨されている。

No.	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量(cm)						残存	備考
						口径	高さ	底径	長さ	厚み	径(cm)	孔径(cm)	
1	須恵器	杯型	玄室			11.8	3.7	7.9					完形③
2	須恵器	舟身	玄室			10.8	3.65	7.2					完形①
3	須恵器	舟身	玄室			11.1	8.6	4.8	8.2				完形③
4	須恵器	高杯(脚)	玄門部開口			-	(4.2)	(10.2)					脚 石縫留 1/4
5	須恵器	高杯	玄室			11.2	16.3	11.4					完形⑧
6	須恵器	皿	玄室			10.5	13.3	(丸底)					完形⑨
7	須恵器	甌(1件)	玄室			-	(10.1)	-					左半奥 欠損 若干
8	土師器	甌	玄室			(10.8)	13.3	(丸底)					土器No.7 1/4
9	須恵器	杯型	美道部付近			(15.4)	4.0	-					土器No.1 1.6
10	須恵器	杯型	美道部付近			(14.8)	4.0	(11.0)					土器No.1 1/4
11	須恵器	杯型	美道部			(11.9)	(3.1)	-					土器No.3 1.5
12	須恵器	高杯(杯)				(11.5)	(4.2)	-					1.5
13	須恵器	平底(1件)	美道	床面		(8.3)	(8.0)	-					近世焼瓦 1.4
14	須恵器	舟身				(12.0)	3.2	(5.4)					1.8 完
15	須恵器	長瓶型	石室全面			-	(8.8)	(17.6)					重複施用 1.6
16	陶器	甌(1件)	埴丘			(21.5)	4.7	-					北東上層 1.4
17	土師器	皿	玄室石室			(9.5)	1.8	8.5					上層 1.6
18	須恵器	壺(底部)		壁面上覆瓦		-	(4.1)	(10.0)					1/4
19	土師器	皿	玄室北裏側			8.6	1.9	3.2					土器No.5 完形
20	土師器	皿	玄室	奥壁側		(5.7)	1.1	3.0					1.4 1/4
21	陶器	鉢	北側壁付近			5.2	2.6	3.7					倒置状取り穴中 完形

No	種類	器種	出土地区	出土遺物	層位	法量(cm)				残存 高さ(cm)	他	備考
						口径	器高	底径	長さ			
22	白磁	皿		玄室		(9.2)	1.8	(5.4)		4.9	4.9	右半前部未見跡
23	土製品	圓子 (菊花型)		玄室付近		(3.6)	(1.1)	-		5.12	5.12	貝を含む縫
24	土製品	圓子(無型)	玄室東隅						39mm	2.05mm	1.2mm	14.2 完形
S1	石製品	砥石		玄室					38.0mm	36.8mm	4.6mm	完形 左半奥無蓋高杯の痕
表2 出土石製品 法量表												
J1	水晶製	切子玉	-	玄室	-				21.7	15.8	1.3~4.4	5.91
J2	水晶製	切子玉	-	玄室	-				21.1	13.5	1.5~4.1	4.34
J3	水晶製	切子玉	-	玄室	-				20.1	14.2	2.0~4.5	4.17
J4	水晶製	切子玉	-	玄室	-				16.7	12.3	1.8	2.98
J5	碧玉製	管玉	-	玄室	-				20.6	7.9	1.4~2.9	2.50
J6	瑪瑙製	小玉	-	玄室	-				7.2	12.7	2.4~5.5	
J7	ガラス製	小玉		玄室					2.6	3.65	1.3	0.07
J8	ガラス製	小玉		玄室					3.1	6.1	1.7	0.17
J9	ガラス製	小玉		玄室					4	4.6	2.3	0.1
J10	ガラス製	小玉	-	玄室	-				2.9	4.1	2.9	0.06
J11	ガラス製	小玉	-	玄室	-				2.7	3.5	1.5	0.06
J12	ガラス製	小玉		玄室					2.7	3.4	1.5	0.05
J13	ガラス製	小玉		玄室					3.5	3.8	1.3	0.1
J14	ガラス製	小玉		玄室					1.5	(3.9)	-	0.01
J15	ガラス製	小玉		玄室					2.3	4.3	1.8	0.07
J16	ガラス製	小玉	-	玄室	-				-	-	0.02	破片
J17	ガラス製	小玉	-	玄室	-				3.5	54~48	2.3~1.9	0.12
J18	ガラス製	小玉	-	玄室	-				1.8	3.3	1.2	0.02

No	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量 (cm)				重量 (g)	口径	底径	長さ	厚み	残存	備考
						口径	器高	底径	長さ							
J19	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				1.9		4.2	1.75	0.05			
J20	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2.4		2.05	1.4~1.5	0.05			
J21	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2		2.8	1.2	0.03			
J22	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.55		3.7	1.2	0.06			
J23	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2.7		3.75	1.7	0.07			
J24	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.6		5.7	1.9	0.17			
J25	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2.55		5.7	1.8	0.11			
J26	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				4.4		9	2.2~2.5	0.42			
J27	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				4.2		5.7	1.75	0.17			
J28	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.9		5.8	1.5	0.19			
J29	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.7		5.3	1.7	0.16			
J30	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.3		6.2	1.7	0.21			
J31	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.5		5.2	1.3	0.14			
J32	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.3		5.5	1.5	0.15			
J33	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2.1		3.2	1.1	0.04			
J34	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.6		4.9	1.5	0.14			
J35	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.2		5.4	1.3	0.14			
J36	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.1		4.8	1.5	0.09			
J37	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.1		3.9	1.2	0.08			
J38	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.3		3.7~4.0	1.5	0.07			
J39	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				3.05		5.25	2	0.1			
J40	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2.2		4.2	1.4	0.06			
J41	ガラス瓶	小玉	-	玄室	-				2.2		4.9	1.5	0.08			

No.	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量 (cm)						残存	備考
						口径	高さ	底径	長さ	厚み	径 (mm)	孔 (mm)	
M1	出土金属器 法量表	見刀	玄室							4.36	3.4	2.05	北側
M2	真鍮品	刀子 (刃部)	玄門附近							6.35	1.18	0.54	複数土
M3	真鍮品	刀子 (柄)	玄門附近							3.6	1.0	0.61	複数土
M4	真鍮品	剪	玄門附近							2.0	0.4	0.4	複数
M5	真鍮品	剪	玄門附近							3.6	0.4	0.45	複数
M6	真鍮品	剪	玄門附近							4.7	0.62	0.4	貝を含む層
M7	真鍮品	剪								5.05	0.55	0.55	
M8	真鍮品	不明	玄室							8.6	2.1	0.9	南東側
M9	真鍮品	不明	玄室							2.95	0.95	0.55	右半前
M10	真鍮品	不明	玄室							10.25	2.1	0.3	南東側
M11	真鍮品	蓋	玄門附近			3.8	2.1	-					複数
M12	金剛製品	耳環	玄室							2.25	2.65	0.53	8.3
M13	金剛製品	耳環	玄室							2.3	2.62	0.55	8.4
M14	金剛製品	耳環	玄室							3.00	3.20	1.01	8.0
M15	金剛製品	耳環	玄門左側 付近 中央上							2.75	3.05	0.82	23.9
M16	金剛製品	空玉	玄室							12.5	11.3-11.8	1.2	
M17	金剛製品	空玉	玄室							7.5	(11.5)	(3.5)	
M18	金剛製品	空玉	玄室							(10.3)	(8.3)	-	
M19	真鍮品	胸鏡	玄室							2.56	2.35	0.6cm	左半奥 右半前
M20	金剛製品	空玉	玄室							-	-	-	右半奥
M21	金剛製品	空玉	玄室							-	-	-	左半
M22	金剛製品	空玉	玄室										

第4章　まとめ－特に遺物について－

出土した古墳時代の遺物には須恵器・土師器など土器や鉄刀・刀子などの鉄製品、耳環・玉類などの装身具がある。平安時代以降の再利用・盗掘などによりそれぞれの出土数は多くない。鉄製品には鉄鎌・馬具などが含まれておらず、玉類の種類が多いことが特徴的である。

1. 土 器

出土した古墳時代の土器は、玄室内から出土したものに須恵器杯蓋・杯身・杯・高杯・壺、土師器壺、漢道部から出土したものに須恵器杯蓋・無蓋高杯・長頸壺、古墳周辺から出土したものに須恵器杯蓋・長頸壺・壺などがある。

玄室内で出土した須恵器蓋杯（1・2）は、外面がヘラ切り未調整で、口径は杯蓋が11.8cm、杯身が10.8cmと小さい。永井編年のⅡ期5B小期に相当し、田辯編年のT K217型式古段階に併行するものと考えられる（永井1995）。漢道部・古墳周辺からも同時期の杯蓋が出土している。漢道部から出土した須恵器杯蓋（9・10）には、天井部外面に回転ヘラケズリが施され、縁部との境に凹線が廻っている。永井編年の2期BC小期に相当し、MT85型式に併行するものと考えられる。2期BC小期の須恵器はこの2点のみで少なく、初葬の時期に当たるのかははっきりせず、Ⅱ期5B小期の可能性も考えられる。Ⅱ期5B小期は、北側に面する丘陵に位置する大型群集墳の西脇古墳群においては横穴式石室が造られ始める3-1期にあたり、西脇古墳群の初期あるいは廻る時期に位置している（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1995）。

2. 装身具

装身具には耳環と玉類がある。耳環は3種類出土しており、被葬者は3人以上と考えられる。玄室奥から出土したM12・13は銅芯金貼で、断面径が0.5cm程度と細い。玄室中央から出土したM14は銅芯金貼で、地金は中空である。玄門部左壁付近から出土したM15は銅芯銀貼で、地金は中実である。中空耳環は6世紀末から7世紀前半に限定され（松本1991）、断面の細いM12・13がやや古い可能性がある。

玉類には石製、ガラス製、金属製のものが出土している。出土位置からすると石室奥のガラス製小玉（緑・青緑）、金銅製空玉、玄室中程の水晶製切子玉・碧玉製管玉・琥珀製小玉・ガラス製小玉（緞）に分かれそうである。なかでも、金銅製空玉は県下で唯一の出土例で、銀製を含めても7例ほどしか存在しない。琥珀製小玉も類例が少ないものである。穿孔面がいびつで、棗玉などの破片を再利用した可能性がある。玉類の副葬の多い点では、西宮山古墳・太市中4・6・9号墳などMT15型式以降のやや古い古墳と共に通しているようである（八賀1982、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003）。

【参考文献】

永井 信弘 1995年 「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡（第6次）』加西市教育委員会

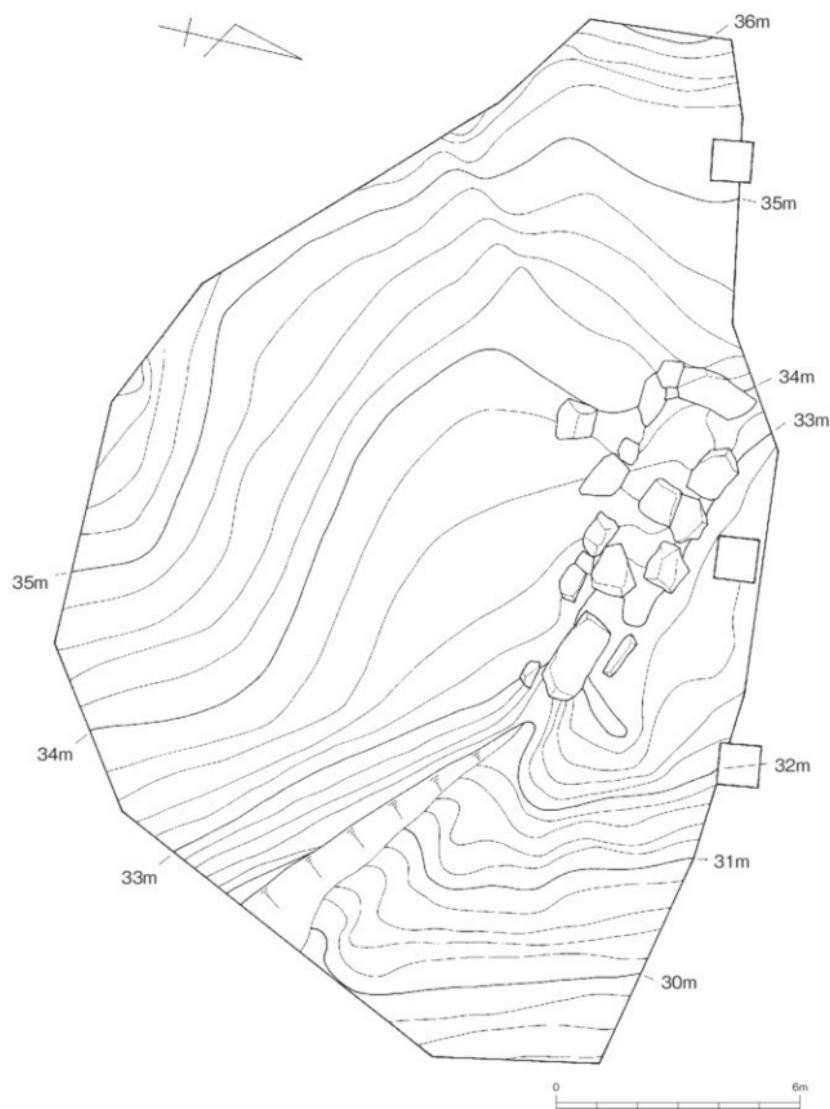
八賀 晋 1982年 『富雄丸山古墳 西宮山古墳 出土遺物』京都国立博物館

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1995年 『西脇古墳群』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003年 『太市中古墳群』

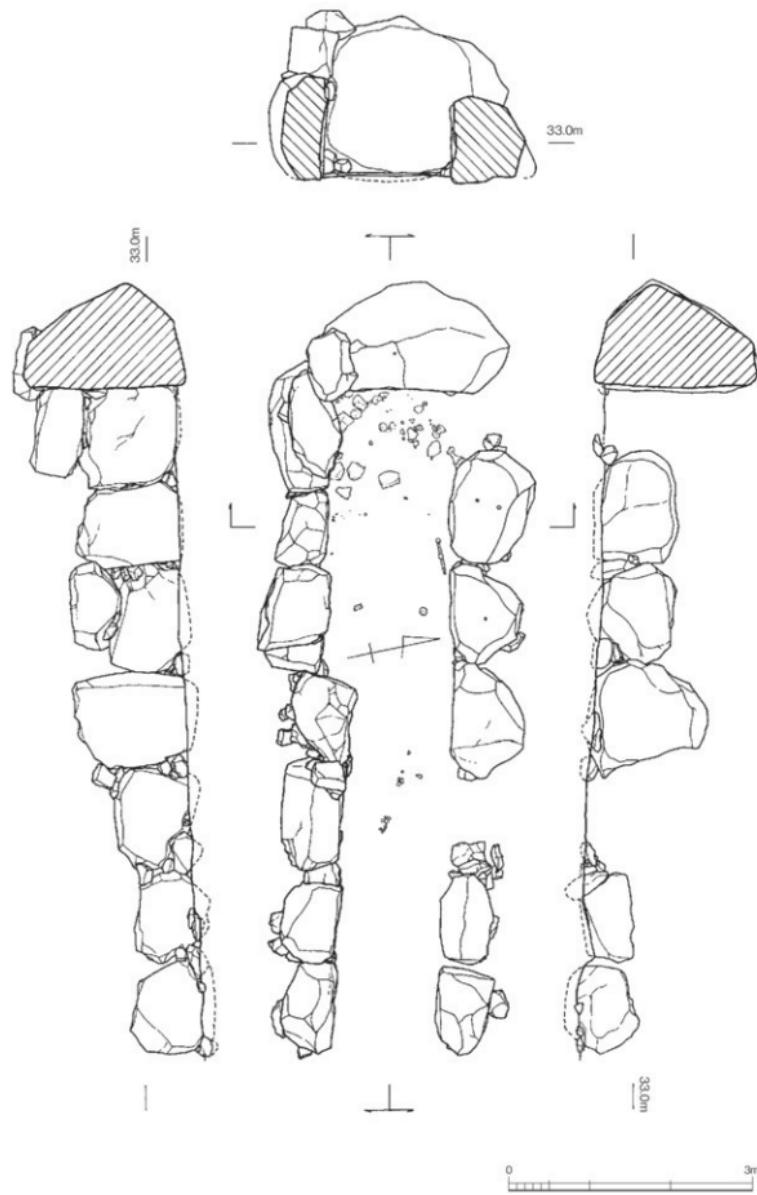
松本百合子 1991年 『耳環』『古墳時代の研究』8古墳II副葬品

図 版

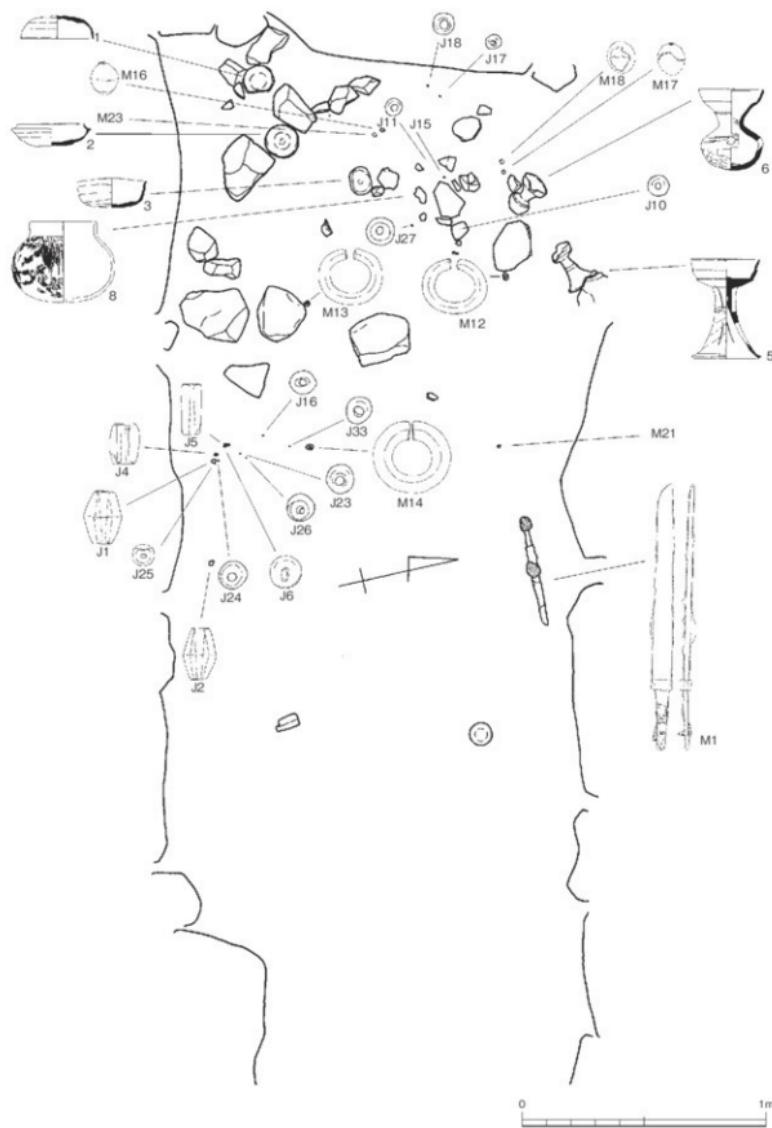


調査前地形測量図

図版 2
遺構



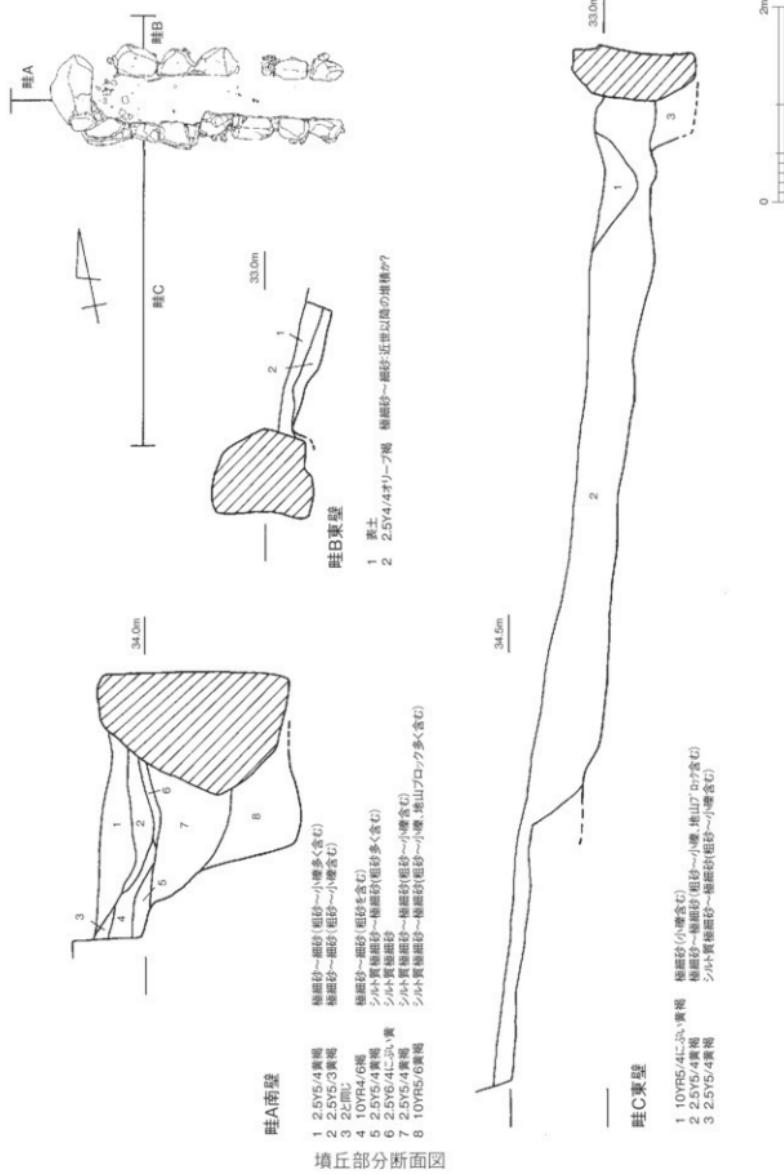
石室平面図・立面図

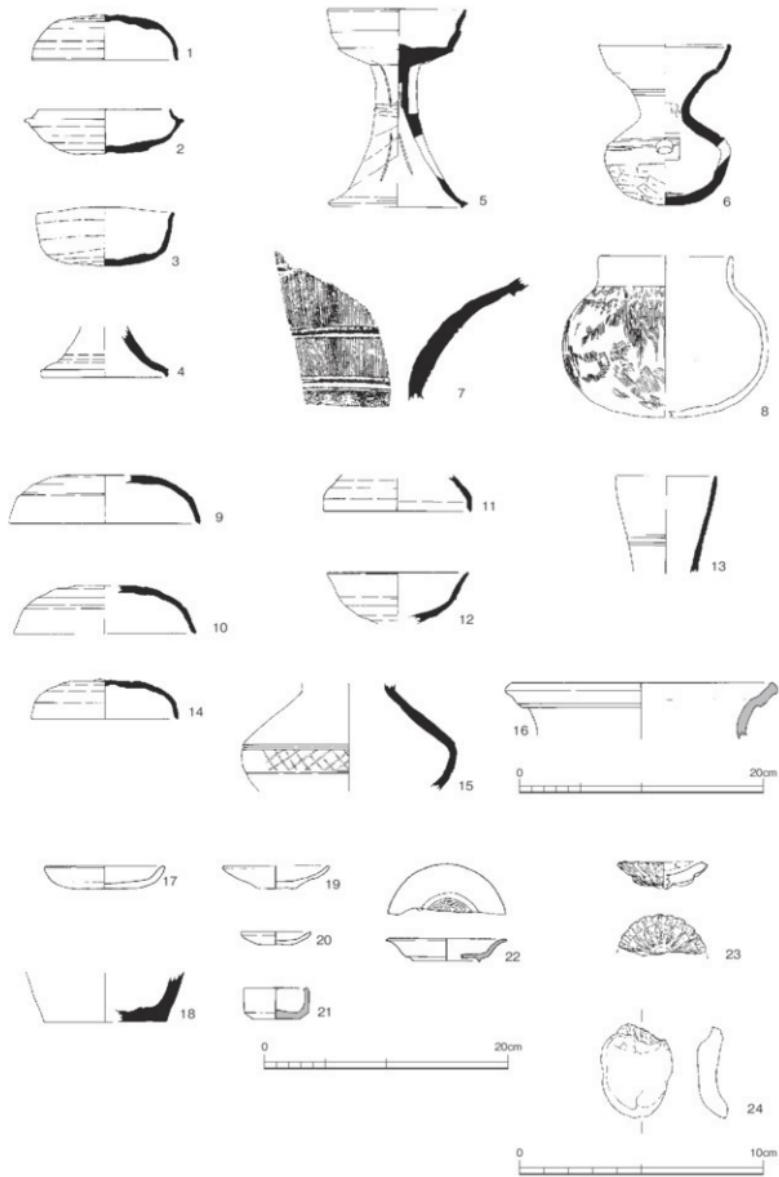


玄室遺物出土状況図

図版 4

遺構

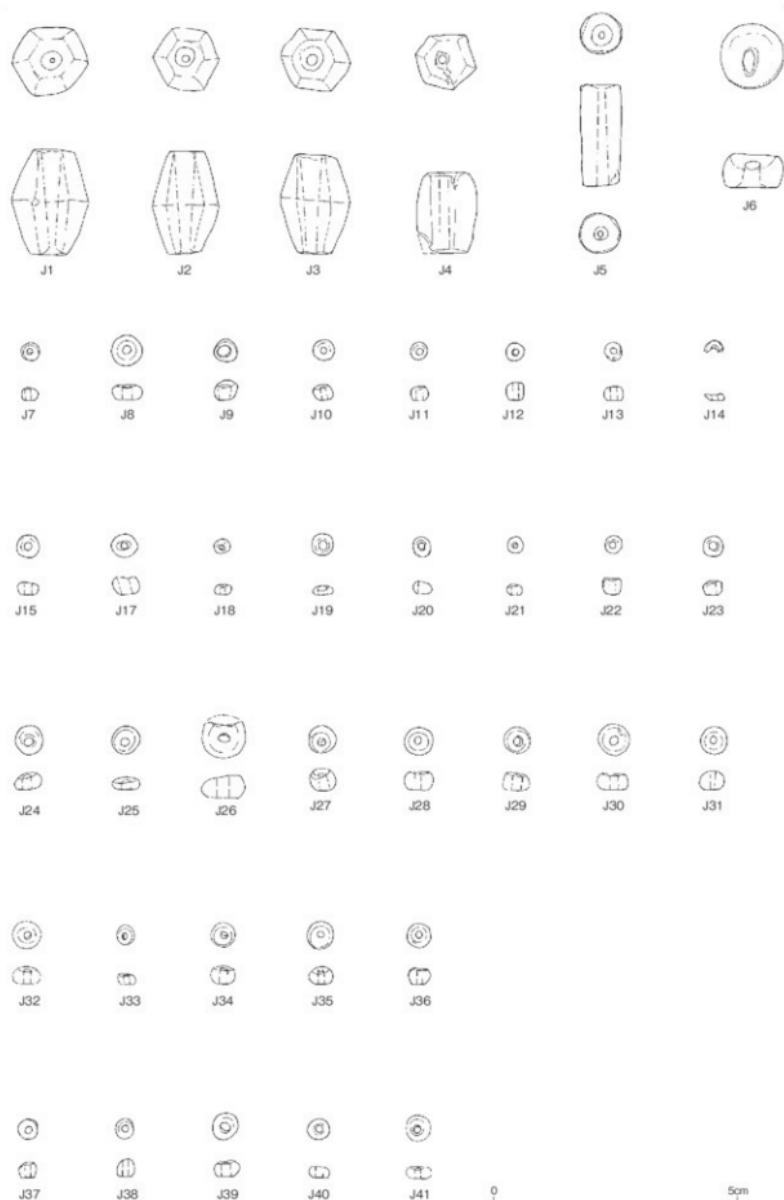




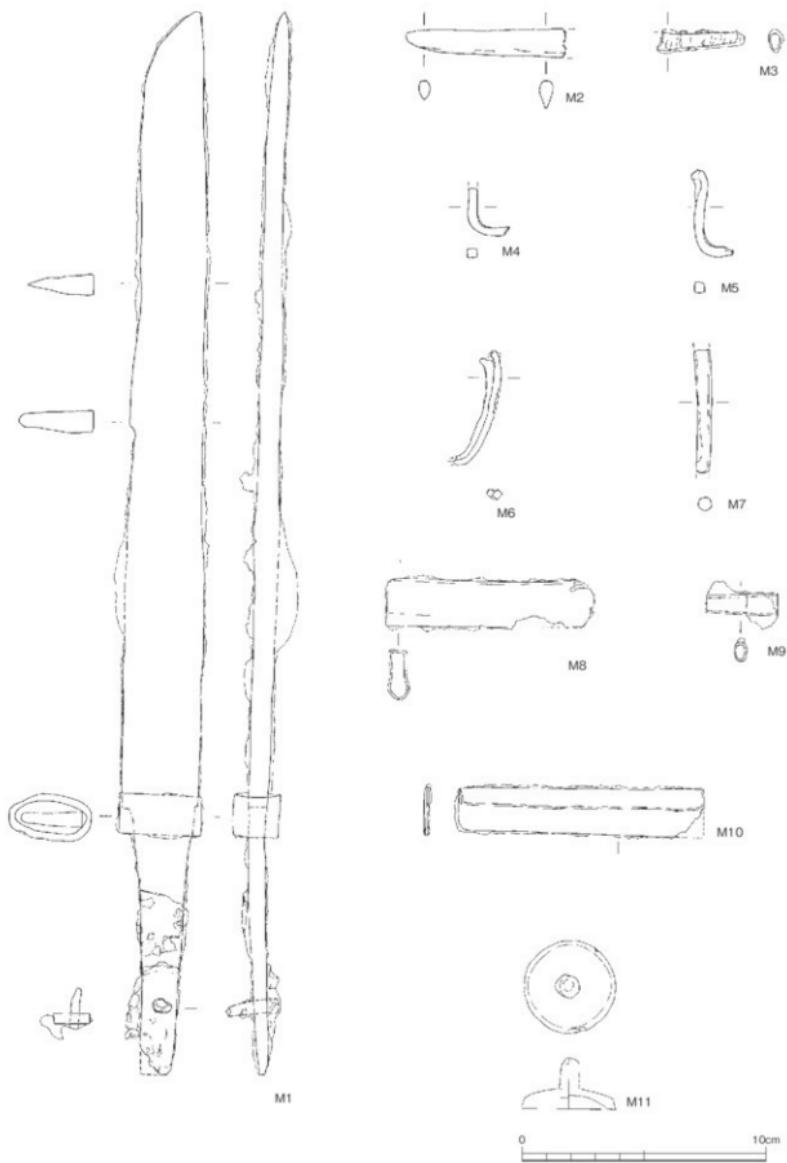
出土土器

図版6

遺物

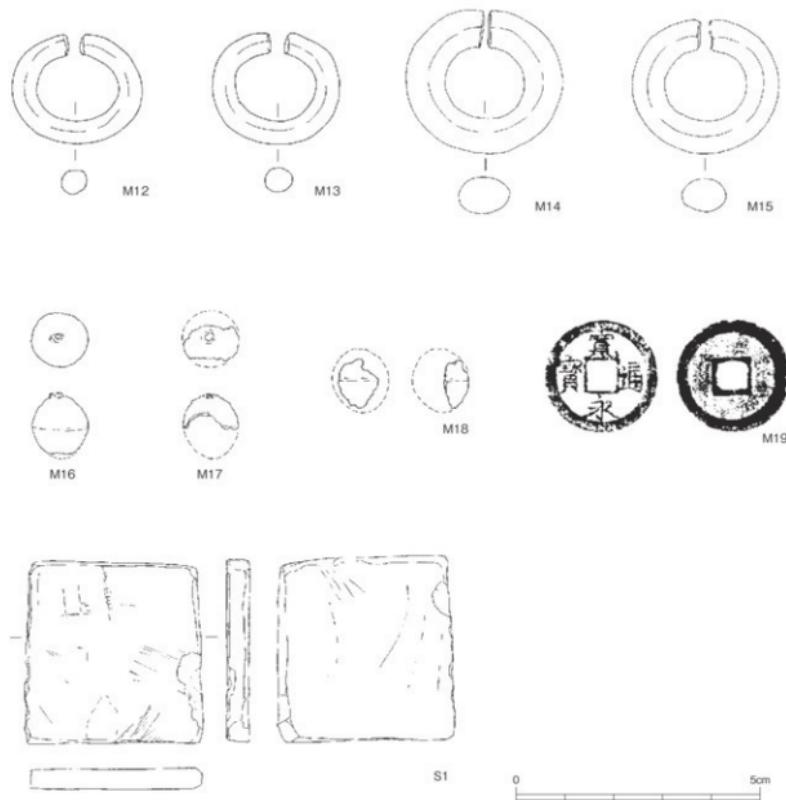


出土玉類



出土金属器①

図版 8
遺物



出土金属器②・出土石製品

写真図版



調査前近景 東から



古墳調査前全景 東から



古墳調査前全景 南西から

写真図版 2

遺構



調査地遠景 東から



古墳遠景 東から



古墳遠景 西から



古墳遠景 北から

写真図版 4

遺構



古墳近景 東から



古墳近景 南から



石室全景① 東から



石室全景② 東から

写真図版 6

遺構



石室全景③ 東から



石室全景④ 西から



石室南側畦土層断面 東から



石室南側石① 北東から



石室南側石② 北から

写真図版 8

遺構



石室北側畦土層断面 東から



石室北側石① 南東から



石室北側石② 南から



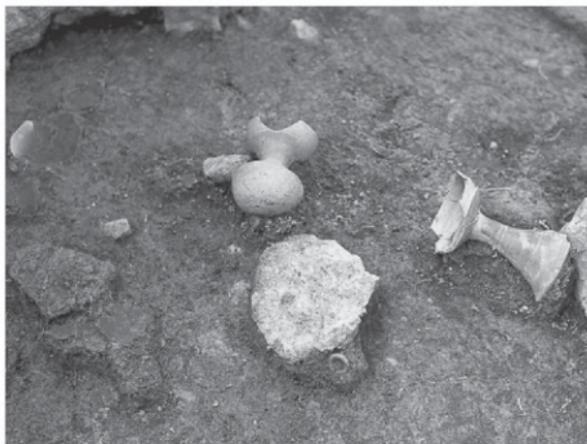
石室内遺物出土状況① 東から



石室内遺物出土状況② 東から



石室内遺物出土状況 西から



遺物出土状況① (須恵器等)



遺物出土状況② (須恵器等)



遺物出土状況③（須恵器等）



遺物出土状況④（刀）



遺物出土状況⑤（耳環）



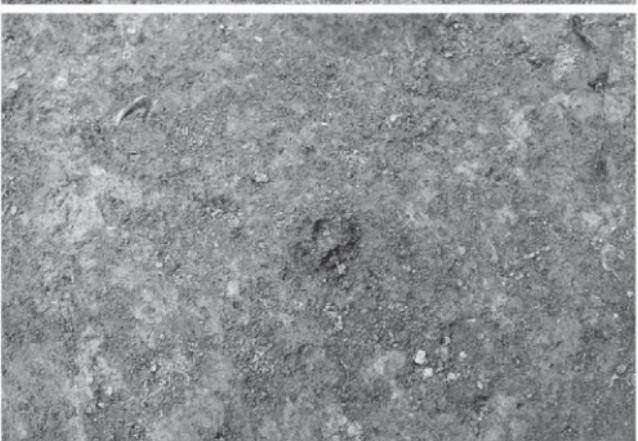
遺物出土状況⑥（耳環）



遺物出土状況⑦（切子玉・管玉）



遺物出土状況⑧（空玉）





遺物出土状況⑫（切子玉）



遺物出土状況⑬（切子玉・玉）



遺物出土状況⑭（小玉）



石室側除去状況 東から



石室奥石及び奥石側土層断面 南から



1



2



3



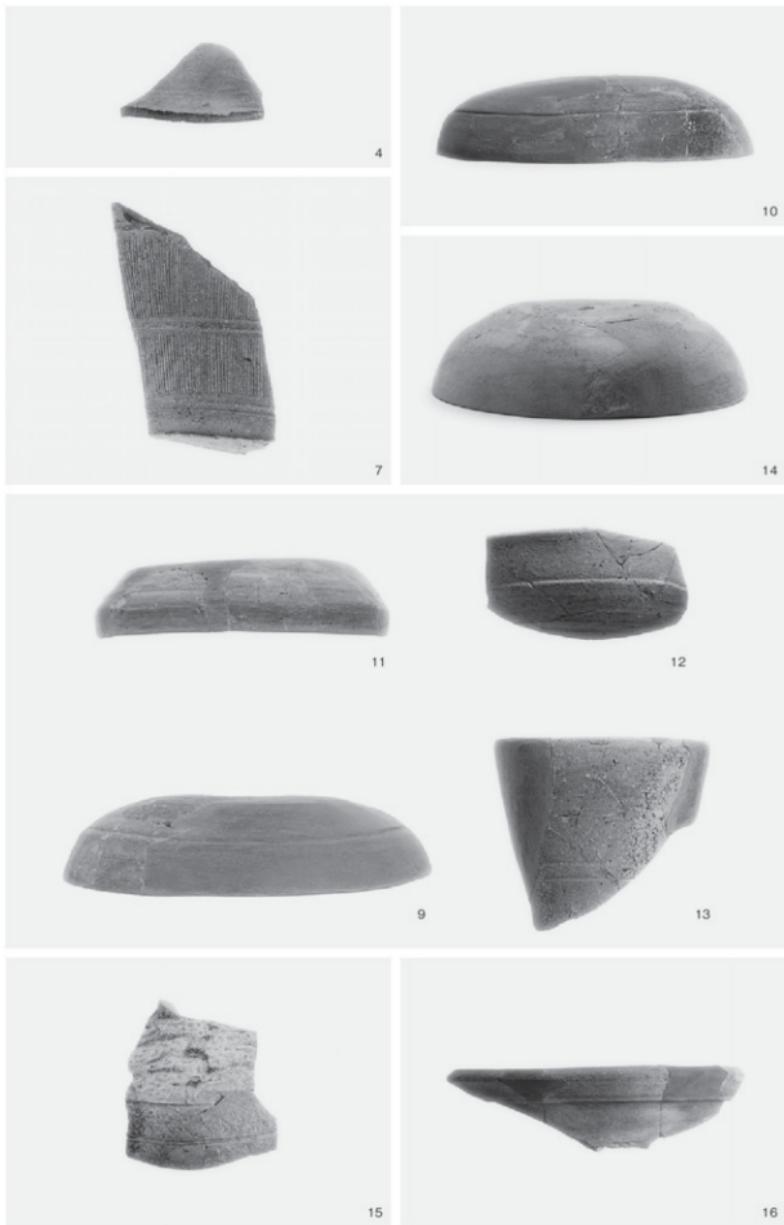
5



6



8



写真図版 18

遺物



17



18



20



19



21



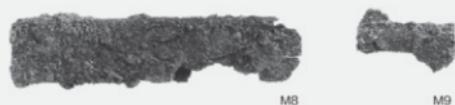
22



23



24



報告書抄録

ふりがな	にしわきまるやま2ごうふん							
書名	西脇丸山2号墳							
副書名	(主)姫路上下線道路改良事業に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第397冊							
編著者名	深江英憲 池田征弘							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel.079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel.078-341-7711							
発行年月日	2011(平成23)年3月22日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西脇丸山2号	姫路市西脇字丸山	28201	020942	34度 51分 40秒	135度 35分 30秒	確認調査 2004年6月23日 本発掘調査 2004年8月24日 ~10月14日	確認調査 (2004178) 7m ² 本発掘調査 (2004177) 308m ²	(主)姫路上下線道路改良事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物			特記事項	
西脇丸山2号	古墳	古墳時代 近世	横穴式石室	須恵器・土師器・玉類・ 金属器・石製品 陶磁器				
調査概要	西脇丸山2号墳の発掘調査報告書である。墳丘は、北側を旧県道工事時に削平され、南側は竹林等の造成等により、状況が不明だが、直径約20mの円墳と考えられる。埋葬主体は横穴式石室であり、石室内は天井石と側壁の一部が落ち込んでいた。また、側壁の一部が抜き取られており、盜掘を受けたことが窺える。時期は、出土した須恵器から6世紀末と考えられ、出土した金銅装空玉は県内でも稀少な出土例である。							

*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告第397冊

西脇丸山2号墳

(主) 鞍路上郡線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年(2011)3月22日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

電話 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

電話 078-341-7711

印刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
